

国内活動

4/29	東京女子大学【園遊会バザー】にて活動紹介	東京女子大学
5/13	岩手・盛岡二高同窓会・白梅会東京支部総会【東京白梅会】	中野サンプラザ
5/19	明星大学・人文学部にて講演	明星大学
7/1	活動報告会『マリ共和国の農村での20年:支援を通して知ったこと』	日本歯科大学・九段ホール
7/22～24	『西アフリカ・マリ共和国の農村の人々への支援:お話と工芸品の展示』 代表・村上一枝の講演(7/22・24)	宇都宮・ぎやらりーあい
9/15～23	【土祭-ひじさい-2012】『アフリカ マリの泥染めを知ろう』 代表・村上一枝とセネガル出身タレント・マンスール氏のトークショー(9/16・19)	益子・MCAA 6GALLERY
9/21	講演『NGOの現場から、農村支援の場合』	名古屋大学・生命農学研究科
10/6・7	【グローバルフェスタジャパン2012】にて活動説明会 *NGO『緑のサヘル』と合同でブースで出展、説明会を行ないました	日比谷公園
10/27	東京盛岡ふるさと会にて活動紹介	ホテルグランドパレス
<2012年11月以降の予定> *変更になる場合がございますので、詳細については事務局までお問い合わせください。		
11/3	【岩手県紫波町ふるさと会】にて活動説明会	東武ホテルレバント東京
11/11	【第32回 むさしの青空市】にて活動紹介	武蔵野市民公園
11/14	『世界に一步踏み出そう～アフリカを感じよう～』 青年ワークショップにて講演	公益財団法人 武蔵野市国際交流協会(MIA)主催 武蔵野国際交流協会(MIA)会議室 (JR武蔵境)
12/2	カラ主催 チャリティコンサート【かけはし2012】	銀座・十字屋ホール

# からばす



Calebasse

企画/編集/発行 特定非営利活動法人  
カラ=西アフリカ農村自立協力会

デザイン:DeeplusDesigns

p1 アフリカ人強し、カナダ移民事情  
JICAガボン事務所企画調査員 ギンドー 加藤 聡子

p3 マリの状況について  
新事業の展開について……代表:村上 一枝

p4 国内活動報告  
① 益子町での「土祭(ヒジサイ)」に参加  
② グローバルフェスタでの初めての試み

p6 現地活動報告  
識字教師育成事業と新規識字教室開設  
スワバ村診療所の完成

p8 国内活動予定

## ア

### アフリカ人強し、カナダ移民事情

ギンドー 加藤 聡子(JICAガボン事務所企画調査員)

私が過去に青年海外協力隊員として暮らしていたニジェールの農村では、多くの男性が出稼ぎに行っていました。隊員活動の終了後にガーナ、トーゴ、カメルーンを回りこれら出稼ぎ者の様子を見に行ったことがあります。ニジェール人の主な出稼ぎ先は西アフリカ内で、農繁期には村に戻ってくる人も多くいます。マリのソニンケ族は家族代々出稼ぎで生計を立てており、海外の出稼ぎ先へ家族メンバーが交代で出かけているようです。

昨今は、彼らに限らず多くのマリ人はチャンスがあればアフリカだけでなくヨーロッパ、北米、さらには日本へも出て行きます。移民先では、運転手や工員、商人、老人の介護人になっている人が多いようですが、留学という形をとってから移民となる例もあります。

事実私の夫も、マリの大学だけでの勉強ではもの足りなく、更にカナダの大学へ留学しました(2003年)。卒業後は、学んだことを活かし現在はカナダで仕事をしています。私が2人の子供を連れて時々訪れるカナダで、アフリカから移民した人たちについて感じたことをご紹介します。

私の家族の住む地域でも、最近では多くのアフリカ人による出稼ぎを超えた移民が見られます。特にケベック州は、フランス語圏ですから西アフリカからの移民が多いです。

しかし、このような人たちは、不足している労働力の補いのための出稼ぎ者とは違い、安定した職業を望んでいますが、職業に就くのは大変な苦勞が付きまといます。一般的には留学生としてビザを取得し、卒業資格を得てから職探しを行い永住ビザを申請します。

ただし、大学に入学しても本国の教育とは大きな学力の差があり、これを克服しなければなりません。卒業後も希望の職につける人の数はごく僅かです。このように多くの移民にとって就職は楽ではないのです。多くの人は、様々なネットワークを使って一時的でも仕事を見つけ、生活費を工面しています。しかし楽な生活ではないといえ、カナダでは社会保障が充実しています。(P2へ)



職探しをしながら医療費や子供の義務教育費は無料ですし、失業や生活手当を受けることができます。もし交通事故に関わっても保障という特典があります。

このような制度は、母国で仕事がなく日々家族に依存する生活よりも、自立できるのが魅力のようです。夫の住むアルバータ州は現在石油開発関連産業に勢いがあり、エドモントンやカルガリーはカナダでも最も失業率の低い町のひとつと聞きます。同州は英語圏ですが、フランス語を話すアフリカ コミュニティーもあり規模は小さいのですが、これを頼って安定した環境を求めて家族連れで移住する人が増えています。

安定した仕事があれば住宅ローンを組めますし、子供教育は本国より恵まれ、学校へ安心して通わせることができます。それに移民アフリカ人にとって英語を話せるようになることは、とても憧れです。子供は幼稚園の時から流暢に英語を話し始めるため、両親も英語で話すようになります。英語で生計を立てる父親だけでなく母親もまた子供に負けないくらい英語を覚えます。彼らの語学能力の高さには驚きです。一方で残念なことに子供たちはフランス語とは縁がなくなり、僅かにかれらの部族語を家族内で話しているだけです。

また父親だけでなく母親の中にも職業技術を身につけたり、英語の勉強を一生懸命にしている人もいます。カナダへ移民して他の国の社会や人にふれ、男性だけではなく女性も学ぶことが必要だと気が付くのでしょう。彼らを見ていて、私は移民という行動を通して、それが単に夫の就職のためだけではないことを改めて知りました。

それは、夫と共に移民してきた女性たちは、母国の男尊女卑の社会に生れて、常に一族の意思に従って嫁入りします。そして3年間子供が出来なければ家を出されます。勿論収入などありません。女性側も子供をたくさん産み、よく働き、太ることが嬉しいことなのです。たとえ夫の家庭内暴力があったとしてもです。ですから女性が素晴らしい秘めた才能を持っていても、芽を出す機会も無く一生埋もれたままているのが殆どです。

故郷を離れ一族や慣習に縛られている状況を一時的でも絶っていることは、女性にも大きなカルチャーショックを感じ、自立する心を与えてくれるのでしょう。男性・夫と共通な意識を持って家庭を守り、子供を育て上げるようになって来るようです。

カナダという外国での生活に適応し、夫と共に家族を守っているアフリカからの移民の女性たちの、美しくたくましい様子や、母国では目にすることも聞くこともなかった能力が芽を出し、活き活きとして過ごす日々の姿を見て、私も学ぶことが多いのです。

## マリの状況について

村上一枝

すでに皆さまをご存知と思いますが、現在のマリ共和国は3月に発生したクーデター後から危険な政情が続き、カラの活動やスタッフの安否について多くの方々にご心配をいただいております。おかげさまで、カラの活動地域は紛争地域とは非常に離れており、スタッフも通常通りに活動を続けております。紙上にてお礼を申し上げます。

当初の計画では私は3月の帰国後、4月2日にマリへ出かけ、4月5日に外務省資金で建設されたスウバ村診療所開設式に日本大使館川田大使のご臨席をいただく予定でしたが、中止となりました。

さらにこの診療所へはマリ保健省クリコロ支所からドクターが派遣される予定が、それも遅れていました。しかしスウバ村の女性代表たちが保健省へ早急なドクターの派遣を数回陳情し、やっと10月20日にドクターが派遣されるという報告がありました。スウバ村は地理的に軍のキャンプのあるクリコロ町へ必ず通過する街道に位置しているため、ドクターもこの村で働くことを躊躇していたのかもしれない。

バマコ市にあるカラの事務局でも警備員を3人雇用し、24時間体制の警備をしておりますが、その内の一人が夜間の警備に危険を感じ、先日退職しました。

ローカル事務所のあるコニナ村へのジャワラの出張も、村での宿泊が危険なため日帰りをしているそうです。理由は、コニナ村郊外に住み始めた兵士たちが泥棒となり夜間に襲ってくる危険があるというのです。信じられないような情報ですが、状況が日毎に変わっています。私は12月のカラ主催のコンサート後にマリへ出張する予定ですが、事前にならないとはっきりしません。

いつになったら平和が戻り、マリへの渡航が可能になるかと不安な気持ちです。今は、バマコで停電がない限り電子メールで連絡が取れ、スタッフからの月間報告書も通常のように届いていますから、このように情報をお届けすることが出来ます。

原田康子さんによる【マリ共和国農村の子供と女性への支援のために～】

# カラ コンサート かけはし 2012

2012年12月2日(日曜日) 開場:13:30 開演:14:00

# CARA CONCERT 2012

会場: 十字屋ホール(松屋デパート向かい/東京都中央区銀座三丁目 03-3561-5250)  
アクセス: 銀座線・丸ノ内線・日比谷線 銀座駅(A9出口) 有楽町線(8出口)ともに徒歩2分  
整理券: 3,800円 (アフリカの小物が当たるお楽しみクジ付き)

お問合せ: カラ(0422-29-7640 fax:0422-29-7688)

主催: (特活)カラ=西アフリカ農村自立協力会・かけはしG P

〒180-0002東京都武蔵野市吉祥寺東町1-1-6-102

## 国内活動報告

2012年4月～2012年10月



## ① 益子町での「土祭(ヒジサイ)」に参加

9月15日から23日までの9日間、益子町主催の「土祭」というイベントに「泥」つながりで、マリの世界的に有名な「泥染め」で参加しました。著名な陶芸家さんたちの組織するNPO「MCAA」様\*1のご好意により参加が可能となりました。

この9日間の会場となった6ギャラリーの白い壁に、マリの泥染めが飾られ美しく見事でした。布に描かれている模様の説明や、使用している土の説明、今も泥染めがマリの人たちの生活に活かしていることなど多くを説明し、素朴な味わいに興味を引かれた方が多くいらっしゃいました。

16日と19日には、セネガル人のマンスール ジャーニュー氏と村上のトークショーをMCAAの代表である鈴木稔氏の司会で行い、マリから持って来たハイビスカスで冷たいジュース作って振舞いました。特に19日は益子在住の染織家、日下田氏のご協力もいただき、氏の考案・指導で50名の参加者限定で益子の土を使って泥染めのワークショップを行いました。これは多分本邦初の試みです。日本の麻布ではランチョンマット大に、マリのバンバラ織では帯状の50cmのものを染めました。模様はドゴンの伝統的な柄で、地色は渋い赤みを帯びとてもシックで、私たちの好む色合いが好評でした。この日は、MCAAのメンバーの方々が何度もトライして完成したマリ料理のティガティゲを昼食にお出ししました。ピーナツペーストで肉や野菜を煮込んだこくのあるソースが、新米のゴハンに添えられてとても美味しく、何回もお代わりする方もいました。期間中は暑い日も雨の日もありましたが、益子の方々の献身的な協力でマリの素晴らしさを多くの方に知っていただきました。MCAAに方々に感謝いたします。



マリ国旗も飾って雰囲気を盛り上げました



熱く語るジャーニュー氏

\*1「MCAA」 Mashiko Ceramics and Arts Association の略(代表:鈴木 稔氏)

設立の発端は、2011年3月11日の東日本大震災に於ける益子陶芸作家の被害に対し、オレゴン陶芸協会から支援が差し伸べられ、遠く海を越え、差し伸べられた支援に勇気づけられ復興へ向う気持ちが生まれたのを機にNPO法人として誕生しました。



## ② グローバルフェスタでの初めての試み

10月6・7日の日比谷公園で開催のグローバルフェスタで、緑のサヘルさんと合同でテントを借り、工芸品の販売だけでなく各々の団体の活動を一日2回「NGO活動から見えるもの」と題して紹介しました。マイクも映像も使わず、お客さまはテント内のブルーシートに座っていただきました。参加者は多くはありませんでしたが、現実的な質問や2日後にベナンへ協力隊員として派遣される女性もいらして、話し甲斐があり実りあるものでした。

このイベントの2日目にとっても感動的なことがありました。宮城学院出身で現在津田塾大学2年生の生徒さんが訪ねて来られました。彼女が宮城学院高等部に在籍していた時に、カラの支援地区のンジャマブグ村に宮城学院創立120周年記念事業として、識字教室建設費に生徒さん主催の学園祭バザー売上金を寄付して下さいました。その後、昨年3月に発生した東北地震の被害のお見舞いにンジャマブグ村の村長から宮城学院の生徒さんたちへお見舞いの手紙が届き、宮城県の新聞にも取り上げられました。

村からの手紙が宮城学院へ到着した時には、彼女は大学生になり専攻学科を決めて授業を受けていましたが、この手紙を知り、ンジャマブグ村の人たちの心が強く胸を打ち、それが契機となって国際協力の分野へ専攻を変えたのだそうです。そのことを目をキラキラさせながら私に話してくれました。彼女の純な美しい心に心を打たれ、横で聞いていた女性が「目をキラキラさせて話すということは、このようなことなのですね」とその状況に感心していました。

なお、生徒さんたちが建設して下さった教室は、今は昼間には1年生と2年生と一緒に学ぶ小学校の教室として、また夜間は識字教室としても村の人たちに役立っています。

この他に、早稲田大学や成蹊大学の生徒さん、またフランスで勉強し支援の道に進みたいという青年がテントを訪れているいろいろな話をしました。

私たちの支援活動も長期になり、時として惰性となることもありますが、支援そのものだけではなく、多くの面で重要な意味を持っていることを改めて感じ反省させられた2日間でした。

上記の他に、日本歯科大学九段ホールをお借りして、現在に至るまでのカラの支援の経過や成果、反省点も含めこれまでの事業のまとめた講演会(7/1)を、また宇都宮市で個人宅のギャラリーをお借りして3日間に渡るマリ工芸品の展示と内2日間の講演会(7/22～24)など、新しい形態を試みました。

やはり工芸品を買っていただくだけではなく、親しくお話しをして発展途上国における支援活動をご理解いただいてから、賛同を得てお買い上げいただくのが本来の姿だと思います。

益子でのイベントの最中でしたが、名古屋大学での講演会も行いました。青年海外協力隊に出向く人、卒業後に商社で働く生徒さんもいました。彼らは、将来何らかの支援をしながら仕事をすることを考えていて、発展途上国の状況や人の意識、日常生活、必要な支援と真の支援等など、またNGOの現地での仕事とODAとの現実的な違いなど、詳細を知りたく多くの質問を受けました。この講演会は、2008年マリへ農業研修に来た神山拓也(名古屋大院生)さんの主催によるもので、参加者は多くありませんでしたが、話し甲斐があり、とても実りあるものでした。

今NGOとかNPO、ボランティアという言葉だけが先行しているようですが、その本質が広く知らされていないように思います。学生さんへ話す機会は非常に重要で意義のあることだと思います。

11月14日には武蔵野国際交流協会の主催で成蹊大学の生徒さんたちを主体に講演会が予定されています。出来るだけ詳しく具体的に彼らの疑問に答え、日本で今置かれている状況が恵まれていることを認識し、そこから支援への道を考えて欲しいと思います。

私たちも現地の人たちの信頼を得て事業を続けています。それに対する責任と日本の若い人たちへ及ぼす影響も考え、責任を感じています。



合同トークショー

## 識字教師育成事業と新規識字教室開設

活動は順調に進み、6月に識字教師フランス語コースの研修会が終了しました。2011年10月から2012年6月までの9カ月の研修は小学校1・2年生の教科書を使っただけの研修ですから、非常に理解されやすかったようです。この研修中に2回の試験を実施しました。全ての研修会場(8カ所)の平均点も非常に良好(70点台)でしたが、雨季の早い到来と、北部での紛争の影響による経済の低調と昨年の早魃で、穀物収穫高が減少した為の食料不足と収入の低下により、出稼ぎ者が多く出て、研修への欠席者が多かったのが目立ちました。

しかし、フランス語を学ぶことは出稼ぎや国内での仕事にも利があるため、ボランティアで参加する青年もいました。女性の参加者は毎回遅刻者が多く、悪びれる様子のない態度にスタッフが厳重に注意をしました。また、研修へ遠方から来る為に時間もかかり、空腹になるから昼食を出してくれ、という要請がありました。しかし拒否しました。

今年の雨季は豪雨の日が多く、通年より道路の決壊がひどく村間の往来が困難だったようですが、スタッフは自転車やバイクを駆使して頑張っています。

新規10カ村への識字教室も完成しました。今までにない立派な建物です。建設工法もバマコから技術者を招聘して1カ村ごとに左官たちへ指導してもらいました。基礎的な技術、屋根へのトタン板の取り付け方法など細かく正しい方法を指導しました。これだけでも非常に成果があったと思います。今までは、屋根の材木にトタンをクギでガンガン打ち付けていましたから、雨が降るとそこを伝わって雨漏りしていました。それとシロアリの被害を受けて材木がボロボロと腐ってしまっていたのですが、今回からは鉄材を使用しましたので、長期間に渡って有効に使用できる識字教室になったと思います。

今までは十分な費用が無くて出来なかったことです。本事業では、JICAから資金を貰えたので思い切って工法を変えました。



村民の無料奉仕で識字教室が建設されました。

## スウバ村診療所の完成

先述のように、スウバ村の人々だけでなく近郊の村の人たち約2万人以上もの期待を背負ってスウバ村診療所が完成しました。

10月20日からドクターが派遣されて本格的な診療が始まります。この診療所が活躍すると多くの人々を助けて地域医療に貢献するようになるでしょう。この診療所の総合的指導者のドクター ジャラはスウバ村出身で、カラとは折に触れ協力し合っているASACOBABAの院長です。今も助産師育成に3人の女性を送って育成してもらっています。

保健コーディネーターのアワの指導も彼にお願いしました。国で決められている、看護師や助産師になる為の条件(高等学校卒業)の学歴を持った人は村にはいません。この条件を満たす人となるとカラの活動域には人材がいなく、いつまでも保健環境が改善されません。都会から助産師を雇用しても、環境や家族が違う中での生活は難しく直ぐに退職してしまいます。カラもこのような経験をしました。

村の人たちの学歴や経験、知識にあったように指導して、ある程度の正しい知識があれば村の保健環境はかなり改善できます。これがカラの目指すところです。

スウバ村診療所も公的な医療システム(セスコム)\*2に従っていますからASACOSOUBAという名称になり、運営管理もASACOBABAの代表で、十分な経験を積んだスタッフのジャワラが付いていますから、満足のいく診療所になると期待しています。



スウバ村診療所案内看板



完成したスウバ村診療所

\*2 「セスコム CSCOM」 Centre de Sante Communautaireの略で1992年の【BAMAKO INITIATIVE】という声明の「住民の方で住民の維持管理により、地域の人達の健康を守る為に住民自らが診療所を建設しその維持管理に当たる」という医療システム。これに基づいた診療所の名称は、ASACO(ASSOCIATION SANTE COMMUNAUTAIREの略)と、地域名または村名を入れ、スウバ(SOUBA)村の場合は【ASACOSOUBA】という診療所名となる。